

これからの大学選びと大学での学び方

小学校の教頭・校長を歴任し、現在も埼玉県屈指の進学校の教壇に立ち続ける名物校長。その大学選びの眼は厳しくも暖かい。半世紀を超えて泳ぎ続ける”戦後教育のシーラカンス”が見つめる先には、いつも若者たちの未来があった。

Q：小川義男校長先生は「世界一受けたい授業」（日本テレビ系）の人気講師としてテレビでもおなじみです。

A：私の場合は家庭の事情がありましたので、まず高等学校を卒業すると同時に中学校の英語の代用教員になりました。北海道教育大学札幌分校に入学したのは高校を卒業して4年後のことです。お金を貯めようと思っていたのに貯まらず、苦学生生活でした。でもその割に真面目な大学生ではありませんでした。まあ、良い成績で入って悪い成績で出たというところでしょうか（笑）。一番で入学して、ビリで卒業したと言えましょう（笑）。

それでも入学式当日の日記にはこう書いてあります。「大学に己を従属させるのではなく、己に大学を従属させて学んで行こう」。この志には少なくとも四年間、忠実でした。これが誇りです。実際に私はこの通りに生きたいと思います。今振り返っても、それなりに素敵な生き方だったと思います。

Q：大学ではなく、“まず自分ありき”ですね。

A：大学で学ぶ姿勢がどうであるかによって、その後の人生が決まってくると思います。主体的に学ぶ姿勢、主体的に研究する姿勢がなければ、大学は高等学校と変わらないものになってしまう。

しかし、受験する上で大学のランクは気になるところでしょう。大学受験を控えた若い諸君はどうしても「有名大学」を目指したくなるかも知れません。気持ちは分かります。でも私は、大学のワッペン、つまり知名度や人気で選ぶことには反対です。私は新卒教員の頃から、“有名大学にあらずんば大学にあらず”とするような風潮には抵抗し続けてきました。この姿勢は今も変わりません。受験生諸君には、この際自分の大学選びが本当に主体的であるかどうかを、深く考えてもらいたいものですね。

Q：大学選びといっても、具体的にどうしていいのか、あるいはじっくり時間をかけられないというところに歯がゆさを感じている受験生も多いのではないのでしょうか。

A：進路選択、特に大学選択は、自分の将来に直結する問題です。自主的、積極的に取り組んでもらいたいと思います。しかし、この進路選択、大学選択ほど若者にとって難しいものはないでしょう。人生経験が極端に少ないうえに、自分の生涯に関わる進路を、短い期間で選択しなければなりません。大変な課題ですよね。ですから、高校の進路指導の先生方、担任の先生方のご指導を仰ぐこと、保護者の意見に耳を傾けることも大切なのです。しかし、結

局、自分自身判断能力を高めていくことが肝要です。

Q:受験生自身の判断能力が問われるわけですね。

A:厳しい言い方かもしれませんが、自分の人生なので、自分で決めなければなりません。とは言っても若者はまだまだ未熟です。私ぐらいの年齢になれば、人生経験もあり、世の中も多少は知っているから、正しい選択ができるかも知れません。しかし、私に残されている選択の可能性はゼロに近いと言って良いでしょう。若者には選択の可能性はあるが判断できない。老人は判断できるが選択の可能性がない。つまり「判断できるときには選択できず、選択できるときには判断できない」というパラドックスが進路選択の宿命なのです。ここに進路選択、あるいは進路指導の難しさが潜んでいます。

ですから、「信念に溢れる青年時代ではあるが、進路選択に関してだけは、老人の意見にも耳を傾けよ。片耳だけは開けておけ」と私は生徒達に語り続けているのです。

Q:間違いのない大学選びのためには、どのような心構えが必要なのでしょうか

A:難しいですね(笑)。とにかく、自分がどの大学、どの学部に進むかということについて、自分は、実は何も知らないのだということを深く認識しておく必要があるでしょう。青春時代は自己主張が強いので、他人の意見に耳を傾けない若者が多くいるものです。そのような信念溢れる若者こそ、実は国家の将来を託するに足る人材ではあるのです。それだけに私は若い諸君に絶大な期待を寄せます。

しかし、どんな自尊心が強く優秀な若者であっても、老人と比べれば判断力はまだまだです。若さとは素晴らしいものではあるが、それを若者自らが誇ってはならない。若さとは未熟さであると心得るくらいのゆとりを若者には期待したいのです。

Q:若者は何事においても謙虚になれということでしょうか

。

A:若者が心底謙虚になることはできないでしょう(笑)。若者に謙虚になれというのは、「木によって魚を求める」ようなものだとは思っています(笑)。大事なものは、謙虚にならなくてもいいけれど、両方の耳をふさいではいけないということです。どんなときにも片方の耳を空けておくくらいのゆとりは保っておいてほしいと思います。

大学の選択、学部の選択に当たっては、受験情報をたくさん獲得した方がよらしい。自分自身、進路に関する文献研究を怠らないことです。一口に学部と言っても、例えば「社会学部」といっても、色々な内容の社会学部があります。その大学のその学部が、具体的に何を指導しているのかというあたりは、やはり自分で研究しなければわからないことなのです。

どの大学を選ぶかではなく、それぞれの大学で何を学ぶかという視点で絞り込みをかけることが大切です。これからの時代は、どの大学を出たかではなく、それぞれの大学で何を学んで来たかが問われます。自分が学ぶべき対象が定まってきたら、それが難関大学であるとか有名大学であるとかとは関係なく、行きたいところに行けばいいのです。まだまだ「学歴社会」は残っていますが、しっかり学ぶ姿勢さえ確立できれば、何が何でもワッペンのついている大学に入らなければならないというようなものではありません。

Q:先生の著書『気品のある生き方』（中経文庫）は若者に向けたメッセージとして非常に興味深いものがあります。

A:自分は一生懸命勉強をして、修養を積んだのだから、人間的にも学問的にも可成りなものである。それなのに、自分にふさわしいポストが与えられていないと嘆く若者がいます。しかしそれは思い違いというものです。企業その他の職域が、あるポストにふさわしい人物を求めようとするとき、その責任を全うできる人物は、意外に少ないものなのです。私は常々「世の中に足りないものはポストではなく人である」と痛感しています。だから普段から個性、能力を磨き優れた資質を身につけた人物には、必ずそれにふさわしいポストが与えられるものです。私は五十一年間も教壇に立ち続けています。戦後教育のシーラカンスと呼ばれる所以です（笑）。その怪物が断言するのですから、ここはひとつ私に騙されてください。決してご損にはなりませんよ（笑）。

『論語』に「人知らずして恨みずまた君子ならずや」とあります。いつき世間に理解されないことがあっても、それを恨まず精進を続けていけば、人は必ず分かってくれるものだという意味ですね。

また、『史記』には、「桃李言わざれども樹下 自ずから蹊を成す」ということわざがあります。桃も李もおいしいからみんなが採りにくるので、木の下には自然に道ができるという意味です。声望を求めず、自らを豊かにせよということなのでしょうね。

Q:人生には、引き潮と満ち潮の時があるということも、先生は著書の中で強調されています。この記事を読む受験生たちにもわかりやすく説明していただけたら幸いです。

A:これはもう不思議としか言いようがないけれど、満ち潮だけの人生がないように、引き潮だけの人生もありません。上手くいかないなと腐ってしまうとき、例えば受験生なら大学受験に失敗して浪人にならざるを得ないときもあります。でも挫折のない人生なんてありません。挫折を恐れる必要はありません。私はむしろ「挫折は新しい可能性の出現である」と考えています。転んだとき、倒れたとき、嘆き悲しむのではなく、これは新しい可能性の出現だと受け止めて、不敵に笑って立ち上がるくらいのたくましさを私は期待します。

やがて必ず潮が満ちて来ます。肝心なのは、そのときの運命の女神の後ろ髪をむんずとつかんで放さないことです（笑）。腕に臂力がなければ後ろ髪をつかみ続けることはできません。ですから平素から、自己内面に力を蓄積しておくことが大切なのです。

また「潮が満ちてきたな」と感じるときには、思い切って波に乗ることが大切です。「それ行けどんどん」くらいの気持ちで「調子に乗る」ことが大切です。

私自身が長く人生を歩いてきて、人生には波があることを痛感します。今振り返れば、あのときは満ち潮だったなあ、と実感できるのです。満ち潮の時、私はある国際会議の日本代表としてヨーロッパに渡り、ロシアのフルシチョフ氏に会って、ご馳走になったこともあります。もの凄い引き潮も経験しました。中国の魯迅先生が「得意冷然 失意泰然」と仰っています。得意の時にも嬉しさのあまり取り乱したりせず、失意の時にも泰然として難局に立ち向かえという意味です。私は魯迅先生をととても尊敬しています。

大学入試の正否に一喜一憂するな、どの大学に進むにしても、その場所で誠実に学び続けよと言いたいですね。

Q:名前に左右されない大学選びですね。

A:そうです。ただし、一言忠告をしておきたいのですが、入試が易しい大学に入ってしっかり勉強している人もいますが、その数は少ないのです。また、難しい大学に入っても、さぼってしまう人もいます。しかしその数は多くありません。だから、入り易い大学に入った場合は、入り難い大学に入った以上に克己心を持ち、努力し抜くことが大切です。その意味では、意志の弱い人は難しい大学を選んで挑戦したらいいでしょう。反対に意志の強い人は、難関大学に行かなくたって、自分にふさわしい大学でしっかり勉強すればいいと思います。要はいかに学ぶかです。あと十年は教壇に立ち続けようと思っているシーラカンスが言うのですから間違いありません(笑)

(平成 17 年 2 月 2 日付け産経新聞掲載)